次に、プロジェクトXにおける石黒先生との打ち合わせを通して、今なお印象に残っている事柄を述べてみたいと思います

一つには、「四万十の宿」はグリーンデベロプメントの思想に基づき、省エネやCO_2の削減にも充分配慮されたことです。具体的には、太陽光発電や屋上緑化、また外断熱使用で、大きな窓で自然通風を確保し、採光窓も多用することによりエアコンや照明の使用量を低減することや、建材は自然素材やリサイクル材を使用していることなどです。そのうえ、工事の際に伐採した建設地の木まで再利用したことです。これは南洋材を船で運んで使用するよりは、はるかにCO_2を削減することができ、当時そこまで徹底するものかと感心したものです。現在のSDGｓを先取りした発想であると言えます。

二つには、先生は1／fゆらぎの世界を追及されたことです。具体的には樋を設置せず、雨音が地面に落ちる音を宿泊客に感じ取ってもらうようにしたことであります。これは自然には間があり、自然のゆらぎとうねりは、間と間をむすびつけ、間の心はまごころにつながると考えられたことに由来しています。

三つには、風水にもこだわられたことです。風水とは自然の氣を読む技術のことで、目に見えざる氣の動きを可視的な地上の現象（風や水など）や方位によって判断し、人間生活に氣のもたらす吉福が及ぶよう、生活（造形）空間を整える技法です。これは、人は氣の豊富な場所に集まり、氣の枯れた場所からは遠ざかると言われていますように、集客の観点からは欠かせない知識であると思います。

四つには、温浴施設に我々の考えを配慮した設計をしていただいたことです。当時キュアティメントの3要素であるスパ+タラソ+アロマは欠かせないと考えておりました。具体的には、スパとしては近郊の源泉からタンクローリーで温泉を浴槽に運ぶことにより実現し、タラソについては屋外の露天風呂に海水をくみあげて、アロマについては薬草、ハーブなどを入れた薬湯にすることにより、キュアティメントを実現したことです。

そのほか、レストランについても地産地消で、旬の食材を顧客に提供することなどのアドバイスをいただいたことなどは今でも心に残っております。

更に開業後、「四万十の宿」は建設時から目指していた「エコテル」の資格を2003年3月に取得しました。「エコテル」は、宿泊施設の環境コンサルティングを手掛けるHVSエコサービス社（米国）が定めた環境に優しい活動基準を満たした施設を認証するものです。審査基準が厳しく、対象も設備や環境プログラム作成のほか従業員教育や日々の活動にまで及ぶため、当時は、わが国ではヒルトン東京ベイ（千葉県浦安市）に次いで二番目で、リゾートタイプとしては国内初でした。まさに本格的なエコロジーホテルの誕生となりました。米国のトラベル＆レジャー誌の2003年7月号では世界のエコロッジ25に選出されたほどです。

以上、小職は微力ながら縁あってプロジェクトXに関わる機会を得ました。このような評価の高い「四万十の宿」・「四万十いやしの里」を、2006年8月に今は亡き母親と訪れることができましたことは、多少なりとも親孝行ができたものと自負しております。